入選　　岐阜県　長畑　美紅　様　（高校生　女性）

私の父は私が小学六年生、兄が高校二年生の時に亡くなった。これから中学に上がって相談事も増えるという時に。多発性骨髄腫という血液のがんだった。

最初は２週間の検査入院と聞いていて、見舞には数回しかいかなかった。だけどそれから２ヵ月の入院後、父はこの世を去った。入院中でも苦しさを口に出さない強い人だった。父が入院してからの２カ月間はあっという間だった。特に農業を営んでいた家では父のいない最期の年は大変だった。今は農家じゃないけど、祖母が野菜を作って母が働きにいっている。父はとても優しかった。私がピアノを練習する時には、いつも横でリズムをたたいてくれた。家族旅行にも連れていってくれた。父との思い出はたくさんある。私が去年体を壊して入院した時に母は「お父さんが残してくれた分があるからお金の心配はいらんよ」と言った。だから高校への進学もお金のことを考えずに私は高校を決めることができた。

今年から兄が年金を払う歳になった。だから、家で時々年金の話をするようになった。その時に社会で習った年金のことを思い出した。それは、少子高齢化が進んで今は昔よりも１人が負担する年金が増えているということ。兄と話したのは、本当に年金が必要なのかということ。このままでは、私が将来負担する額も増える一方だし、年金をもらう前に死んでしまったら意味がないんじゃないか。だったら父は払い損だったんじゃないかと考えた。

そんな時、今回年金の話を聞いて初めて遺族年金について知った。私は年金についてくわしく知らなかった。年金はただ、老後の生活を支えるためだけのものだと思っていた。でもそれは違っていて、母が「お金の心配はいらんよ」と言ったのには、この遺族年金の分も入っていたんだと思った。年金は老後のためだけじゃないことがわかった。必要ないと思っていた年金が実はこんな役割をしていたことを知った。

私は応募されたエッセイを読んだ。この人たちは、年金によって助けられている。その形は違っても、この年金の制度によってたくさんの人が支えられている。

現に私の祖母も年金をもらって生活している。私は知ることが大切だと思った。５年後には私も年金を払うようになる。その時には、もっと年金についてくわしく理解して年金を納めるようにしたいと思う。

私は今、進学を考えている。こうしてお金の心配をせずに、進学を考えられるのも、生活ができるのも父のおかげである。今回このエッセイを書くにあたって生活が忙しくて、考えることが少なくなっていた父のことをじっくり思う機会ができたこと。そして、遺族年金について知ることができたことをうれしく思う。私はこれから自分の進路を決めて、まずは、大学進学という目標に向けて勉強に励んでいきたい。今回年金について学んだことは忘れないようにしたい。